



夏の素謡と

仕舞の会

暮れなばなげの花衣
袖を片敷き
臥しにけり

言葉の響きの美しさ——。

仕舞 能の一部を紋付袴姿で舞う

素謡 能の台本を謡い語る

- | | | | |
|---------------------|----------------------------|-------------------------|---------------------|
| 鷓鴣 <small>う</small> | 大原御幸 <small>おはらごこう</small> | 雲林院 <small>うんりん</small> | 賀茂 <small>か</small> |
| 鯛 <small>かい</small> | 観世 | 古橋 | 林喜右衛門 |
| 浦部 | 清和 | 正邦 | |
| 幸裕 | | | |

UKAI

OHARAGOKO

UNRININ

KAMO

令和7年 7月13日(日)
午前11時開演 (10時30分開場)

京都観世会館
京都市左京区岡崎円勝寺町44(東山仁王門東入)

日時

会場

入場料

一般前売	4,500円
一般当日	5,000円
学生	2,500円

全席自由席

※通信講座受講生、放送大学、老人大学は一般料金

●チケットのお申込みは、お電話またはチケット販売サイト、出演能楽師へお願いいたします。

ご予約・お問合せ

京都観世会館
京都市左京区岡崎円勝寺町44

TEL.075-771-6114
<http://www.kyoto-kanze.jp>

チケット
販売サイト



夏の素謡と仕舞の会

令和七年七月十三日(日)
午前十一時開演(十時三十分開場)

賀茂

ツレ松野 浩行
天女樹下 千慧

林喜右衛門 宮本 茂樹

樹下 千慧
松野 浩行
鷲尾世志子
橋本 忠樹

河村 晴道
林喜右衛門
杉浦 豊彦
宮本 茂樹

仕舞

道明寺 丸
天鼓

大江 信行
河村 博重
梅田 嘉宏

味方 梓
浦田 保浩
河村 和貴

雲林院

古橋 正邦 橋本 雅夫

青木真由人
宮川 卓也
寺澤 拓海
田茂井廣道

片山 伸吾
古橋 正邦
橋本 雅夫
磯道

仕舞

雨月 中入前
松風 武田 邦弘

片山 峻佑
吉浪 壽晃
吉田 潔司
河村浩太郎

(二時半頃)

大原御幸

法皇井上 裕久
局井上裕之真
内侍大江 泰正

観世 清和 片山九郎右衛門

ワッレ大江 広祐

井上裕之真 分林 道治
大江 泰正 観世 清和
大江 広祐 片山九郎右衛門
橋本 光史 井上 裕久

鶺鴒飼

女郎花 遊行柳クセ
鳥追舟 阿漕

河村 和晃
青木 道喜
河村 晴久
田茂井廣道

吉田 和史
越賀 隆之
橋本擴三郎
深野 貴彦

浦部 幸裕 味方 團 弘之助

橋本 充基 大江 信行
浅井 風矢 浦部 幸裕
吉田 篤史 浦田 保浩
谷 弘之助 味方 團

附祝言 (終了予定 四時頃)

主催 公益社団法人 京都観世会

※時間はおよその目安です

入賀茂

初夏の京都が舞台。播磨の室の明神に仕える神職が、室と一體であるという賀茂明神へ参詣します。神職は川辺に新しい祭壇が築かれ、白木綿に白羽の矢を立ててあるのを不思議に思ひ、ちよとそへ現れた水汲みの女性二人に訊を尋ねると、「この御矢は当社の御神体とも御神物とも崇め申しているもの」と答えます。ある時、流れてきた白羽の矢を持ち帰り家の軒先に挿すと、知らぬうちに子を授かり男子を産み、矢は天に上り鳴神に挿すと、別雷神に、その母君も神となったのだと、賀茂三社の縁起を語り、女は洛中洛外の川の名所を挙げつつ水を汲み神に手向け、やがて自分は神であると言ひ神隠れします。やがて女性の御祖神(みおやのしん)について別雷神(わけいのかみ)が出現し、雷鳴とどろかせ国土を守護する神威を示すのでした。金春禪竹作。

入雲林院

幼い頃から「伊勢物語」を愛読する片屋の里の公光(きんみつ)は、夢の告げにより桜の花の咲き乱れる都へ向い、紫野の雲林院に着きます。公光が桜の一枝を折ると、風流で小うさぎの老翁が現れ、それを咎め、二人は互いに桜を詠んだ古歌を引いて、花折る行為の善悪を言い争います。公光が「伊勢物語」を持った業平と二条の后が雲林院にむむ姿を夢で見、そして都へ来た由を語ると、老翁は「伊勢物語」の秘事を授けよう、中の陰で靈験を待てと自ら業平の靈であると明かし夕霞の中へ消え去ります。やがて現れた業平の靈は、二条の后との恋を物語り、昔日を懐かしみ、春の夜の月下に夜遊の舞を舞い、夜もすがら「昔男のいしへ」を語り聞かせます。そのうち業平の姿も消え、公光の夢も覚めるのでした。

素謡(すうたい)とは

能の台本(謡本)を、舞台上で謡う演奏形式です。謡うこと、語ることで情景や心情を表現します。能には「源氏物語」や「平家物語」などの古典を題材にした名作が多く伝わっており、詞(詞章)の美しさは高い評価を得ています。素謡は、その「謡うこと、語ること」のみのシンプルな表現の面白さから、大江の頃より大変な流行となりました。また、正統には歴史的に「京観世」とよばれる「素謡」の文化があります。江戸初期寛文の時代、服部宗巴(九世観世大夫黒書)の弟、服部栞元の息のちに福王盛親が、西陣にあつたといわれる観世屋敷で謡の教授をしたのが始まりです。以後、京都では能だけでなく、人々が謡だけをたしなむ「素謡」というジャンルが好まれ、連綿と受け継がれてきました。戦前は、京の辻々で謡の音がよく聞かれたようでした。情緒豊かな「素謡」をライブでじっくりと聴いてみてください。

仕舞(しまい)とは

能の一部(見せどころ)を、紋付袴姿で謡にあわせて舞う演奏形式です。ほとんどの曲は扇を持ちますが、演目によっては長刀や杖などを持つものもあります。舞い手の骨格が見えやすいので、能のテッサンと評され、演者の個性と技を楽します。数分の演技で能の醍醐味が味わえるのが仕舞です。

入大原御幸

臣下により、後白河法皇の大原への御幸が告げられます。大原では、建礼門院が阿波内侍・大納言と共に寂光院に籠り、我が子安徳天皇、母二位平家の一門の菩提を弔っています。仏への供物を採りに、大納言局を伴い山へ分け入ったその留守に、法皇が訪ねられます。山より帰った女院は御幸を知り、闊浮(えんぶ)の世に引き戻される苦しさへ耐えながら法皇に安んじます。六道の苦しみそのままであった平家滅亡の有様、さらに安徳帝の最期までその母である女院に語りながら法皇。我が子を追って入水するも、源氏の武士に引き上げられ命ながらえ苦しさ、女院は涙を止めることができません。やがて還幸となり、法皇を見送る女院。戦で我が子も母も愛するすべてを失った一人の女性の悲しみと苦悩は、この寂光院に永遠に留まるのでした。

入鶺鴒飼

夏の甲斐国(山梨)が舞台。旅の僧が宿を求め川沿いの御堂に泊まります。そこに鶺鴒を休めるためにやって来た鶺鴒使いの老人に、僧は殺生戒を説きますが、二三年前に川下の岩落という地で逢った鶺鴒使いにしても受け入れたことを思い出します。老人は、その鶺鴒使いは禁漁区での密猟のために捕らえられ、ふしつけ(す巻き)にされて死んだことを語り、実は自分がその鶺鴒使いの幽霊であると話します。その話を聞いた僧は甲斐を申し出、幽霊は罪障懺悔に鶺鴒の様子を見て闇に消えます。僧が法華経で申すところへ閻魔大王が現れ、無間地獄に墮とすべき鶺鴒使いたが、僧の回向と、かつての一僧一宿の功力によって救われ、極楽へ送ることになったと告げるのです。櫻並左衛門五郎原作、世阿弥改作。

夏の素謡と仕舞の会

日時 令和7年7月13日(日) 午前11時開演(10時30分開場)
会場 京都観世会館 京都市左京区岡崎門勝寺町44
入場料 一般前売 4,500円 一般当日 5,000円 学生 2,500円

※上演中の写真撮影・録音・録画はお断りします。
※携帯電話の着信音・時計のアラーム音が鳴らないよう、あらかじめ電源をお切りください。
※都合により出演者に変更がある場合がございますので、あらかじめご了承ください。
※お車の方は、会館東隣りの有料駐車場、または岡崎公園市営駐車場等をご利用ください。
※公演中止の場合を除き、入場券払戻はできません。



【交通アクセス】

- JR京都駅から
- 地下鉄烏丸線「烏丸御池駅」にて地下鉄東西線に乗り換え、「東山駅」下車、1番出口より徒歩約5分
 - 京都駅前バスのりばA1より市バス5系統「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車、D2より86・206系統「東山仁王門」下車(乗車時間約30分)
- 四条河原町から
- バスのりばEより市バス31・46・201・203系統「東山仁王門」下車(乗車時間約15分)
- 京阪三条駅から
- 市バス5系統「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車
 - 地下鉄東西線に乗り換え、「東山駅」下車